

短 報

大学院ウィメンズヘルス・助産学 国際協働論演習の英国研修の報告(2012)

有森 直子¹⁾ 喜納 瑞貴²⁾

The Report of the 2012 International Cooperation Theory Seminar in a Graduate Program of Women's Health and Midwifery Education in England

Naoko ARIMORI¹⁾ Mizuki KINO²⁾

[Abstract]

As a part of the International Collaboration Theory Seminar of the Women's Health and Midwifery Program in Luke's College of Nursing (SLCN), we had previously visited some universities, where midwifery education programs are provided, including the Graduate Nursing Schools of Oregon Health & Sciences University and the University of California San Francisco in the United States. Here we report on our first experience to visit Plymouth University, the only midwifery educational institution in Devon, (located in Southwest England), United Kingdom.

In Devon, we visited four facilities across primary and tertiary maternity hospitals. Graduate school students from our institution presented the status of maternity care in Japan and exchanged opinions.

In the U.K. National Health Service organizes the establishment of perinatal care services, from primary to tertiary care. The planned number of healthcare professionals to be cultivated, is based on the necessity in each county. Pregnant women receive care from different midwifery facilities according to their level of risk. When abnormalities such as bleeding or premature delivery occur, patients will visit the appropriate medical institution by themselves bringing with them, their own medical records. The midwifery students manage their 3-year record of practice as their portfolio, and qualified midwives known as sign-off mentors provide the students with appropriate supervision and assessment of their competency in practice.

[Key words] midwifery education, graduate program, international cooperation, internship, England

[要 旨]

私たちは、聖路加看護大学ウィメンズヘルス・助産学専攻の科目で開講されている国際協働論において、過去には、北米のオレゴンヘルスリサーチセンター、UCSFの大学院で助産師教育を行っている大学を見学してきた。本年度、私たちは、初めて英国のDevon州で唯一の助産師養成学校であるプリマス大学にて見学を行ったので報告する。

見学した施設は、第1次医療から3次医療にわたる4つの産科施設である。また、日本の産科ケアを本学の院生が発表して意見交換を行った。

英国は、NHSにより周産期ケアサービスも1次医療から3次医療の計画的な配置、州ごとに医療職の必要数が育成されている。妊婦はそのリスクレベルにより、適した産科施設でケアを受けているが、出血や早産など異常となった時には妊婦が自らカルテを持参し、必要となる医療機関を受診する。学生は、実習の3年間の実習記録をPortfolioとして自己管理し、資格を持った助産師が学生に指導を行い、実習能力を評価していた。

1) 聖路加看護大学看護実践教育センター St. Luke's College of Nursing, Research Center for Development of Nursing Practice
2) 聖路加看護大学大学院ウィメンズヘルス・助産学博士前期課程 助産学 St. Luke's College of Nursing, Master's program in Women's Health and Midwifery

〔キーワード〕 助産教育，大学院教育，国際協働論，インターンシップ，英国

I. はじめに

聖路加看護大学大学院 ウィメンズヘルス・助産学専攻に開講されている「国際協働論演習」は、2008年に開設以来、オレゴンヘルスサイエンス、UCSFといずれも北米の大学院における助産師教育を行っている施設にて研修を行ってきた。

今回、保健医療制度も異なる英国にある大学学部教育の中で助産教育が行われているプリマス大学において、国際協働論演習を行ったので、報告する。

II. 英国の保健制度とプリマス大学の概要

プリマス大学は、英国の南西部デボン州に位置する総合大学であり、学生数は3万人を超え、3,000人のスタッフから教育を行っている。助産教育は、学部の3年課程で行われている。1学年20名の定員である。日本と異なり、看護師のライセンスは必須ではないため助産師に必要となる科目のみを3年間学ぶ（図1）。

助産以外にも周手術期（2年）、地域緊急医療（3年）において、同様の資格取得ライセンスがある。プリマス大学は、デボン州で必要な助産師を育成する唯一の教育機関であり、倍率は7倍とかなり狭き門である。就職後の給与体系は、看護職との格差は明らかであることも人気が高まる理由であると教員は語っていた。

英国は、NHS（National health service）の政策下、保健医療スタッフの必要数から養成数が算出され計画的

に育成されている。さらに、地域における周産期システムはその役割が明確であり、第3次医療、第2次医療、第1次医療は、その数は国が管理している。医療機関は、互いの役割を認識しており、各医療機関はその役割遂行に努めている。すなわち、緊急搬送が行われる病院は、その使命を果たすことが役割であることをスタッフは認識しているため、どれほど忙しくても、入院を拒否することはない。また、妊婦自身が、自らのカルテを持参して医療機関をうけるため、正常な経過をたどっていた妊婦であっても、異常（早産、異常出血等）の場合は、妊婦が直接該当する医療機関に自らのカルテを持って受診する（図2）。カルテは、妊娠期、分娩期、産褥/新生児期に分かれており、そのカルテは、NHSに集約されてデータとして国民に還元される。

その内容は、健診における医療情報の他に、その時期に必要な「知識」も必要にして十分な内容が掲載されており、自己管理（特に異常時の判断）に役立つフォームとなっている。

III. プリマス大学における研修プログラムの実際

1. 研修に至る経緯

プリマス大学は、日本の遺伝看護学において共同研究を行ってきたDr.Heather Skirtonの所属する大学であり、以前より聖路加看護大学・有森との交流があった。

また、助産課程のDr.Faye Dorisとは、The International Confederation of Midwivesにおいて、以前教員をしてきた江藤宏美氏が演習の可能性について、具体的な話

表1 研修スケジュール

DATE	MIDWIFERY PROGRAMME (Mizuki Kino – contact Margaret Fisher)
Tuesday 17 th July	<i>Travel Heathrow – Plymouth Tour of campus</i>
Wednesday 18 th July	<i>Train Plymouth (depart 08.53) – Newton Abbot (arrive 09.34)</i> <ul style="list-style-type: none"> • Margaret collect from station and take to Honiton Midwife-led Unit • Exeter Centre for Women's Health (consultant-led Maternity Unit) ; tour and work a few hours together <i>Train Newton Abbot (depart 17.04) – Plymouth (arrive 17.42)</i>
Thursday 19 th July	<ul style="list-style-type: none"> • Morning at Derriford Maternity Unit in Plymouth (shadow year 3 student) • Afternoon with Community Midwife in Plymouth
Friday 20 th July	<i>Margaret/ other collect from accommodation and take to PAHC near Derriford</i> <ul style="list-style-type: none"> • 10-10.45am presentation about Midwifery in Japan • 10.45 – 11.00 – coffee break • 11.00 – 13.00 – attend caseloading introduction day with year 1 students and other year 2/ 3 students and staff on panel • 13.00 – 14.00 – lunch with Midwifery students • 14.00 – 17.00 – visit Children's Centre/ Parentcraft/ service-user group <i>Evening social event to be arranged</i>
Saturday 21 st July	<i>travel to London</i>
Sunday 22 nd July	The UCL Institute of Neurology Prion Clinic (with Genetic Nursing)
Monday 23 rd July	<i>Free time in London</i>
Tuesday 24 th July	<i>Depart from Heathrow - Japan</i>

NHS No.

Maternity Unit

CONFIDENTIAL

These notes should be carried by the expectant mother at all times during her pregnancy. If found, please return the notes immediately to the owner, or her midwife or maternity unit.

NHS

Pregnancy

Notes

Address

Postcode

Date of birth Unit No.

These Pregnancy Notes are a guide to your options during pregnancy, and are intended to help you make informed choices. The explanations in these notes are a general guide only, and not everything will be relevant to you. Please feel free to ask any questions. Additional information is also available on www.preg.info; or in leaflets which you may be given as and when needed.

EDD

Communication Needs

Assistance required No Yes Details Your preferred name

Do you speak English No Yes What is your first language

Preferred language Interpreter

Plan of care

Depending on your circumstances, you and your partner will have the choice between midwifery based care or maternity team based care during your pregnancy. Please discuss your choices/options with your midwife. This will be based on your individual medical and obstetric history.

Date recorded	Planned place of birth	Lead professional	Job title	Reason if changed

Maternity contacts

Named Midwife

Maternity Unit

Antenatal Clinic Delivery Suite

Community Office Ambulance

Primary care contacts

Centre Other (s)

GP (+ initial)

Postcode(GP)

Health Visitor

Next of Kin

Name

Address

Relation

Emergency Contact

Name

Address

page
1

図2 妊婦が自己管理するカルテ（妊婦期）

し合いを進めていた。本年度は、遺伝看護学の院生は、Dr.Heather Skirton との交渉において、研修プログラムを作成し、助産課程の院生は、Ms.Margaret Fisher との打ち合わせにより、遺伝看護とは異なる研修プログラムを作成した。このような経緯の中で、同じ行程の中で異なるプログラムが可能となった。

2. プログラム内容

今回は、昨年度開講された「遺伝看護学」を履修している院生と同時期にプリマス大学での演習を行った。そのため一部共通のプログラムも含まれた(表1)。

1) 1次周産期施設: Honiton Midwife-led Unit の見学

研修日の初日(7/18)は、Newton Abbot 駅から、Ms.Margaret Fisher の自家用車に乗って、1時間ほど移動して、まず Honiton Midwife-led Unit を見学した。ここは、助産師のみが妊婦健診から分娩介助までを行う、ローリスクを対象にした施設である。2年生の助産師学生は、事前の打ち合わせをスタッフと行うと1人で妊婦健診を行っていた。妊婦とその夫は助産師学生の説明をよく聞き、“pregnancy notes” に記入されたことを確認していた。妊婦への情報提供は、非常に充実した貧血予防、母乳育児などNHSが発行するリーフレットが揃っていた。この日はお産もなく、非常にゆったりしており、助産師学生は、卒業後はこの施設での就職を希望していると語っていた。

2) 2次周産期施設: Exeter Centre for Women's Health の見学

次に訪問した施設は、Exeter Centre for Women's Health である。こちらは、2次医療的な施設であり、医師も常駐している43床からなる中規模の産科施設である。水中出産も可能な施設であった。

ランチには、日本からプリマス大学で助産師のライセンスを取得した男性助産師の方と懇談する機会を得た。コーディネータのMs. Margaret Fisher は彼の恩師にあたり、彼のきめ細かで確実なケアを高く評価していた。

Ms. Margaret Fisher は、教員としてプリマス地区にある実習施設を1日数カ所回り、学生の実習状況を確認しているとのことであった。基本的に学生は臨床の助産師と打ち合わせて自分の実習課題に取り組んでいた。しかし、大学と点在する実習施設は、電車で1時間、車の移動でも数時間を要し、学生はスケジュール調整を綿密に行っていた。

3) 地域の子育て支援施設: Tavistock children's centre の見学

研修2日目(7/19)は、Community Midwife の活動を見学する目的で、Tavistock Children's Centre を見学した。この施設は1階にキッチンやプレイルームを備え、妊娠期から親になる女性への食事教育や幼児期の子ども

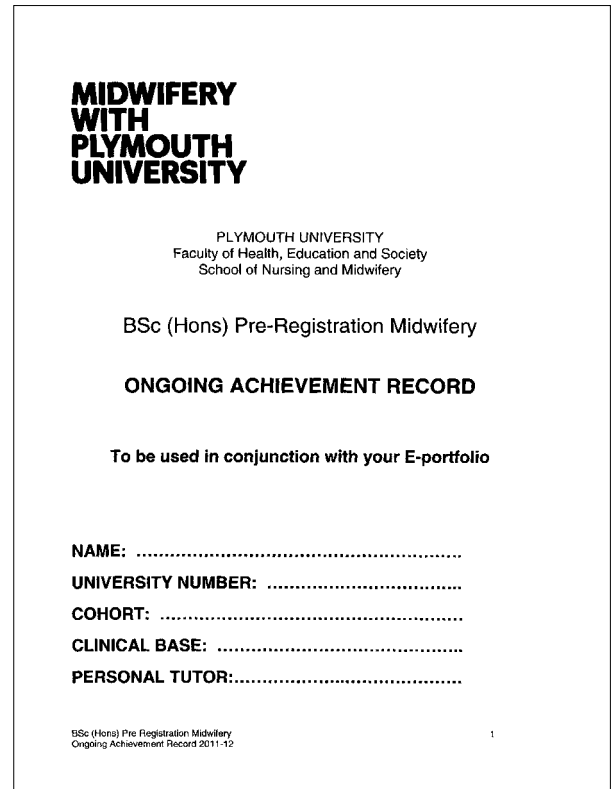


図3 学生の自己管理する portfolio

に対して栄養バランスのとれた食事を調理の機会を通して教育する多様なプログラムが準備されていた。この施設は、虐待予防の目的で作られたとのことである。2階には、2名のCommunity Midwifeがおり、この地域の妊産婦の電話相談、家庭訪問を行っていた。Community Midwifeとなる条件としては、産科での臨床経験が5年以上必要とのことであった。本学の院生は、移民の家族の同行訪問をさせていただいた。言葉の障壁もあるが、地域に溶け込みながら子育てができるように助産師はフォローアップを続けていた。また、2階のフロアには、育児のサポーターとして、医療職ではない女性スタッフが10名程度常駐し、1階のプログラム運営の支援やコミュニティの気になる家族のサポートについて検討していた。彼らは、保健医療専門職とは異なる役割を担う人材として、専門職よりも安価であることもありイギリスでは多く雇用されているとのことであった。

4) 3次周産期施設: Derriford Maternity Unit in Plymouth の見学

その後、このデボン州の3次医療施設を担う教育病院、Derriford Maternity Unit in Plymouth を見学した。全体で1,100床、産科のベッド数は産前・産褥病棟に27床、分娩棟に12室である。産科病棟は人でひしめきあい、外来からの患者(妊婦)が帝王切開のために手術室に運ばれるなどとても慌ただしい状況であった。この施設では3名の助産師学生が、私たちの院内のオリエンテーションをしてくれた。学生はスタッフからも信頼され、



写真1 Honiton Midwifery Unitにて。施設スタッフ、助産学生、教員と共に



写真2 周産期施設にて実習中の助産学生と



写真3 宿泊施設の様子

非常に落ち着いて対応している姿は、とても頼もしく感じられた。2年生で、既に40例の分娩介助、200例の妊婦健診を経験していた。その学生は、卒業後はこの施設での就職を希望しており、「自分はこのように緊急事態に対応する病棟で働きたい」と語っていた。学生は、常にPortfolioを持参しており、巡回する教員からコメントをうけていた（図3）。

5) 大学の授業への参加

研修3日目（7/20）は、プリマス大学の1年生が継続実習に入る前のオリエンテーションの授業に参加した。基本的な妊婦健診の技術のほか、オンコール体制についてのケースとの連絡方法などについて、上級生が具体的な助言をするグループワークで進めていた。継続受け持ち事例についての説明のリーフレットが準備されており、助産師学生についての説明や、学生の実習の関わり方等詳しく記載されていた。その後、本学の院生が日本の助産師のケアについて、特に助産所のケアについて写真等を用いて紹介した。英国の学生は、お灸、指圧、フリースタイル分娩、助産所での食事について興味深く質問しており、日本への訪問を強く希望する者もあった。

3. 実習を可能にするための受け入れ体制

プリマス大学では、地域的に非常に治安が良く宿泊施設（寮）がキャンパス内にあり、個室で自炊も可能であり、快適な研修生活であった。今回は、遺伝看護の学生2名と教員で4名であり、移動手段においても適した人数であった。

コーディネータのMs.Margaret Fisherは、非常に多忙中、事前の打ち合わせも迅速な対応で、きめ細やかな配慮により非常にリラックスして見学を行うことができた。

IV. 考察

1. NHSの施策下における妊婦自らが選択できる周産期医療制度

リスクスクリーニングにより、妊婦は、自分に適した産科施設でケアを受けていた。日本では、産科施設の偏在と慢性的な医師、助産師の不足が一向に改善されてい

ない。さらに開業助産所が抱える大きな問題は、異常時の搬送問題である。英国では産婦がカルテを管理することで、医療者が搬送先を探すことなく医療が提供される。また、カルテは一括してNHSが回収して国民に役立つ統計データとして還元されている。日本では、医療データが国内の研究機関毎に保管して分析するなど、非常に効率が悪い。早急に国民に有益な形で還元される医療データの一元化が期待される。

2. 学生が自分の学習の達成度をコントロールするシステム

学生は、Portfolioを用いて自らの経験項目を管理し、修了までの学修計画をコントロールしていた。また、実習施設の交渉を自立して行い、24時間の実習を計画的に進めていた。学生自らが学修の進捗状況を確認し、必要となるサポートを自己調整できるために、Portfolioは非常に効果的であると思われる。

謝辞

今回の見学においてご指導いただいた、プリマス大学、Ms.Margaret Fisher, Dr.Heather Skirton, Dr.Faye Doris 教職員の皆様、助産師学生の皆様に感謝いたします。

また、事前調整から多大なご支援をいただいた教務部中島薫氏に感謝いたします。

参考文献

- 1) 江藤宏美, 荒木裕美, 石塚愛子, 稲見枝里子, 江澤綾, 大林薫, 萩原美穂, 長谷川文子, 藤中宏美, 鷺尾美代子 (2008). 大学院ウィメンズヘルス・助産学専攻における国際協働論演習の展開. 聖路加看護大学紀要, 34, 98-103.
- 2) 新井香里, 新田祥子, 福富規子, 江藤宏美 (2010). 大学院ウィメンズヘルス・助産学専攻における国際協働論演習の拡大. 聖路加看護大学紀要, 36, 59-63.
- 3) 近藤克則 (2012). 「医療クライシス」を超えて—イギリスと日本の医療・介護のゆくえ. 第1版. 医学書院.
- 4) 成田伸 (2012). 助産師基礎教育テキスト 2012年版(3) 周産期における医療の質と安全. 73-78. 日本看護協会出版会.